平成30年度佐賀プライドプログラム事業の報告書

実施主体：佐賀県
委託先法人：ＡＳＳＲ株式会社

1　事業名
平成30年度佐賀プライドプログラム事業

2　事業要旨
発達障害のある高等学校の生徒に対し、発達障害者支援の専門家による半年間月２回（計１２回）、継続的に指導・助言（個別/集団）を実施し、本人の自己認知・感情コントロール・ライフスキル向上及び進路選択（大学/就職）をサポートするとともに、参加者同士でグループワークを行い、交流を図る。
また、個別に発達検査・心理検査などの個別支援を実施し、その検査結果を本人や親に伝えることで、プログラムの効果を増進させる。
さらに、高校生のプログラム実施中、別室で親の茶話会を開催し、親同士の情報交換や繋がりを醸成するとともに、専門のスタッフが親からの相談に答えることで、親の負担軽減や子どもとの関わり方の改善を図った。

3　事業目的
発達障害のある高等学校の生徒本人の自己認知・感情コントロール・ライフスキル向上及び障害特性に応じた適切な進路選択（大学／就職）をサポートすることで、二次障害の事前防止を図るとともに、今後社会で活躍できる人材の育成につなげることを目的とする。

4　事業の実施内容
（１）平成30年９月～平成31年３月
（２）利用対象者
発達障害のある県内の高等学校の生徒であり、以下の４つの条件を満たす生徒12名
・医師から発達障害（ＬＤ／ＡＤＨＤ／自閉症）の診断を受けている
・在籍する高等学校又は高等専修学校の在学証明を得ている
・高校１年生又は２年生
・事業の効果測定調査に協力できる方
・保護者が毎回参加ができる方

平成３０年度佐賀プライドプログラム利用者一覧

No.	利用者名	住所	診断名
1	A	武雄市	アスペルガー症候群
2	B	佐賀市	自閉スペクトラム症
3	C	佐賀市	自閉スペクトラム症
4	D	伊万里市	自閉スペクトラム症
5	E	神埼市	自閉スペクトラム症
6	F	みやき町	アスペルガー症候群
7	G	伊万里市	広汎性発達障害（自閉症）
8	H	武雄市	注意欠陥多動性障害
9	I	有田町	アスペルガー症候群
10	J	嬉野市	広汎性発達障害
11	K	神埼市	自閉スペクトラム症
12	L	佐賀市	自閉スペクトラム症

（３）実施内容

以下の内容で実施

１）保護者への事業内容説明（１回１時間×12 名）

２）アセスメントの実施（事前アセスメント１回 1.5 時間×12 名、その他アセスメント２～３回（１回２時間）×12 名、アセスメントの結果報告そ

れぞれ１回１時間）

３）個別セッションの実施

生徒本人への事前の事業内容説明

４）グループプログラムの実施６回（１回２時間）

生徒向けプログラム及び、保護者向けプログラム

（４）実施体制

心と発達の相談支援 another planet 臨床発達心理士３名

5　支援の実施結果

（１）自己認知支援

グループ指導外に、検査（ADOS-2）を実施し、生徒の正しい障害特性の理解を行った。グループ指導（計６回）においては、障害の説明、自分の長所と短所、周囲の人から自分がどう見えているかなどを考え、話し合った。保護者からも子どもの長所・短所を書きだしてもらうことで、自己評価と他者評価の違いについても認識することができ、自身の特性理解を深めることができた。

また、保護者に対し、毎日の子どもの行動記録をつけてもらうことで、子どもの行動の特徴、感情の表現方法、感情の波などの正しい理解を促した。

（２）ライフスキル向上支援

グループ指導外に、検査（Vineland-Ⅱ）を指導前後に行い、現在の生活レベルの適応行動の把握をした。結果を保護者に説明し、子どもの正しい状況把握に努めた。ライフスキル向上のために、ABA（応用行動分析）の随伴性契約についての説明を行い、家での生活支援についての方法を提案した。

（３）感情コントロール

グループ指導外に、保護者に検査（子どもの行動チェックリストと BDI-Ⅱ）を、生徒本人に対し検査（ＣＤＩ）を実施し、状況把握を行った。グループ指導において、CBT（認知行動療法）を活用した The CAT-Kit という教材を用い、自身の感情（喜び・怒り）についての分析を行い、感情コントロールの方略について学んだ。コントロールの方略は、Tool Box という視覚支援にまとめ、必要なときに思い出せるように、各自持ち運べるようにした。保護者には、日々の子どもの行動記録から感情の理解と、ＡＢＣ分析の説明を行い、子どもの行動に対し、結果をどのように提示するのがいいのかを説

明した。

（4）進路選択支援

それぞれの進路についての考えを聞き、それぞれの相談に応じた。また、特性を考えての進路選択について説明を行った。ライフスキルが今後の進路においても重要なことから、手帳の使い方の説明と、実際の取り組みを数回に渡り確認・支援した。

6　分析、考察

それぞれの生徒・保護者についての報告

・対象者A

グループのメンバーと比較して、自身の特性を考えることができ、ライフスキルの重要性を認識できていた。

・対象者B

ストレス値が高い方であったが、プログラム受講後は少し下がっており、前向きな方略を考えることができた。

・対象者C

日頃から支援を受けているが、新たな仲間との違いや似ているところについて考えることができていた。

・対象者D

積極的に自身の学びに取り組み、グループ内でも発言できていた。

・対象者E

グループでの学びを楽しみ、自分の話を発信する場として活用していた。人が話すときにコントロールすることに取り組めた。

・対象者F

考えを表現することに難しさがあるものの、何事にもまじめに取り組むことができていた。保護者が今後の支援や進路について逃げずに考えようとするようになってきている。

・対象者G

今後も相談が必要とのことで、支援の申し込みをされた。

・対象者H

グループの他のメンバーと診断名が違っていたが、自分の特性についてよく考えることができた。

・対象者I

検査を通じて、特性の理解が深まったとのこと。

・対象者J

元々割と安定していたが、さらに感情についてしっかり考えることができ、考え方の切り替えを見出すことができた。

・対象者K
人前で積極的に話すことはないが、よく自身のことを振り返ることができていた。また保護者が本人の特性について積極的に学ぶ様子が見られた。

・対象者L
本人はグループを好んでいないようであったが、同じ診断を持つ人がいると知る機会となったことを、保護者は喜ばれていた。

上記の結果より、参加者全員に対して効果の大小はあるが自分自身を理解して発達障害に対してうまく向き合う姿勢が見られた。また対象者の保護者も本プログラムに参加させることにより、子供の障害に対して向き合う姿勢が見られた。高校生の段階では、幼児期と比較すると親から受ける影響小さく、人格形成もかなりできているが、親が子の障害特性を理解することによりまだまだ改善の余地がある。今後は、プログラムの検査結果を精査して、効果的な自己認識の方法や親の子に対する効果的な接し方について検討していく。

6　成果の公表実績・計画

佐賀県ホームページで取り組み結果を公表する予定である。